

とくいく「禅語」十五

■ 松樹千年の翠（しょうじゅせんねんのみどり）

朝夕涼しい日も多くなり秋めいてきました。山の木々が紅葉の色付きを増し、ドングリなどの木の実が落ち、賑やかな装いとなる季節です。全国各地の紅葉スポットには、やがては散りゆくその前に、美しく身を色付かせた木々を見るために毎年多くの観光客が訪れます。人に誉められたくて木々は紅葉するのではなく、そこになんら作為がないからこそ、人は紅葉する木々の美しさに見惚れるのかもしれませんが。見頃というものがある木々はスポットライトを浴びることができますが、反対に見頃のない木々は寂しいものです。紅葉でなくても、たとえば春の桜だとか、夏の百日紅だとか、その時々でしか愛でることのできない木々も多くあります、

一年を通してほとんど変化がありません。ずっと緑のままで、姿を変える時がないから注目を浴びる旬というものもありません。しかし、見頃がないとは、逆に言えば常に見頃なのだと考えることもできます。

移ろいやすい世の中であって、黙とした不変の緑を保ち続ける松。そんな松の姿に節操と生命力を見出し、寂然として佇む風格を讃えたのが「松樹千年の翠」という禅語です。松夏の猛暑のなかでも、冬の吹雪のなかでも、その針葉を天へと向けて変わらずに佇立している。それは、時代や流行に流されることのない確固とした「自分」を持った存在のように感じられます。

秋が過ぎ、葉の落ち果てた落葉樹のなかでも松の緑は変わりません。人の真価があらわれるのも、そんな冬のような逆境や苦境に立った時です。葉を落とすように屈しそうになるなか、それでもすっと立ち続けることのできる人は、松のような不変の強さを持った人と言えるでしょう。年月を越えて変わらずに緑である松は、いつも変わらないようであり、実際には生え代わりを続けています。古くなった葉は茶枯れて散り、春には萌黄色の新芽が伸びてきます。目立たなくても、松の内では生き活きとした躍動が続いているのです。

伝統芸能の世界では、伝統を継承していくことが重要な意味を持っています。禅の世界もまた然りで、そのような不変の部分というのは、機織りでいうところの縦糸です。その縦糸に時代という横糸を通して、「今」という布を生み出していく。変わらない縦糸があるから、どんな横糸を交わらせても美しい「今」が編まれていくのです。

道場で言えば「人間形成と人間教育」という理念が縦糸。稽古内容やイベント、運営方法を時代や環境の変化に合わせてよりよい形に創り上げていくことが横糸です。生命力溢れる松のように、次世代に繋がる道場づくりを目指していきたいと思います。